文学者も船をチャーターしてまで島に渡る、のだ

野中健一

二〇二一年十二月十八日、乱歩生誕地の三重県名張、造船所勤務・岩田準一との交流の地の鳥羽へ、私は、センターの丹羽みさとさん、村松まりあさん、宮本祐希さんに同行した。乱歩の映像資料のデジタルアーカイブ化にともなって映像に記録された足跡を辿ることが目的だ。まずは、名張の一九五五年生誕記念碑除幕式への参加・滞在映像に記録されている場所と行動を辿った。街路を歩き小路を抜けて、水路に沿って、川辺に立ち、宴がもたれた料亭で弁当を求め、現地所蔵資料を見せていただき、と訪ね歩いて痕跡を確認し、あらたな情報も得ていった。

その地に立ち、しゃがみ込み、思索する姿に、文学のフィールドワークとはこういうものかと、地理学を専攻する私は興味を抱いた。この後、津市の乱歩の墓参りも予定されていたが、予定以上に時間を費やしたため、鳥羽へ直行することになった。そのおかげで乗車時間が長くなり、車中で訪ねた料亭の豪華な鰻弁当をゆっくり味わうことができた。墓石・墓碑も作家の存在につながる大切なものであることを伺った。これが叶わなかったのは残念だったが、食事から乱歩への思索も広げることができた。時空間を超越した作家作品世界へのあくなき追求（行きたいところ盛りだくさんで所要時間距離を計算して予定が組まれていなかったってことですが…）に感動した。

車窓から海が見えてくると、丹羽さんが「坂手島にも行ってみたかったんです」とつぶやいた。ここには乱歩が渡島時に見初めて結婚した隆さんの実家がある。鳥羽から市営定期船ですぐ行けるものの、あいにく都合の良い便がなかった。ちょっと残念そうな顔をしていたので、私はインドネシアやパプアニューギニアでの経験から「港で漁船に頼んで渡してもらえるかも」といったところ、丹羽さんがすぐさまネットで調べて「あった！」と。丹羽さんが電話をして話をつけた。待っていたのは九十人乗りの立派な客船だった（写真1）。十分のクルーズを楽しんで着いた港の地図に生家が記されていた。家が建て込んだ、しかしひっそりした漁村集落の細い路地を歩いていった先に隆さんの生家がきれいな状態で建っていた。二人のやりとりを想像し、さらに奥手にある神社へ行くと、階段石柱に「平井隆」の名を見つけた（写真2）。昭和二年建立、乱歩の妻として寄進した証に、ぐっときていたみなさんであった。

帰途にはちょうど良い市営船の便があった。船からはおおぜいの人と荷物が降りてきた。日中は島の人たちは町で用事の最中、だから島へ渡る船便もなく集落も静かだったのだ。

船から見える波しぶきもまた作家・作品の深遠な世界へいざなう。乱歩は別府への旅で瀬戸内の海を動画でたくさん撮っていた。その記録にはどんな意味があったのだろう？名張にも水路が張り巡らせされていた。水に何かカギが？デッキから眺めるのも文学なのだ。

見たいところをあまねく詰め込み、ためらうことなく機を掴み、あるいは流れに任せて、足で辿り、現地を五感で感じて思索し、作家・作品の理解へ分析へと展開していく。『パノラマ島奇譚』のモデルともいわれるミキモト真珠島で、潜りの実演を終えた海女さんを乗せて去って行く船に丹羽さんは両手を振って感謝を表していた。これこそが文学者なのだ。自他の共感、作家の生きた時空間を追体験し想いを馳せること、現場に立つ意味はここにありと、文学フィールドワークの醍醐味を知ることができた。今回の映像記録もまた後の世で辿られることを楽しみにしている。

（立教大学）

写真1　チャーター船に乗り込む

写真2　神社で平井隆の刻字を見つける